

論 説

ライフスタイルの転換： 畑作牧畜文明社会から稲作漁撈文明社会へ

安 田 喜 憲*

Shift of the lifestyle: from the dry field farming with cattle breeding to
the rice cultivating piscatory life style

Yoshinori YASUDA*

Abstract

We call "animal civilization" which exploit the plenty of nature constantly, on the other hand there is a "plant civilization" which has a lifestyle coexist with nature. The representative agricultural type of the former civilization is the dry field farming with cattle breeding, on the other hand the representative of the later civilization is the rice cultivating piscatory lifestyle. In this report, the author wish to show the new lifestyle which is based on the rice cultivating piscatory people eating rice with fish and shells. The lifestyle of the rice cultivating piscatory people has kept the water circulation of life and created the mind to consider the others.

Key Words : Dry field farming with cattle breeding, Rice cultivating piscatory people, Lifestyle, animal civilization, plant civilization.

キーワード : 畑作牧畜文明、稲作漁撈文明、ライフスタイル、動物文明、植物文明

1. 動物文明と植物文明

人類文明史には自然を一方的に搾取し砂漠に変える「動物文明」と、この美しい地球で千年も万年も生き続けることに最高の価値を置いた「植物文明」がある。このことを最初に指摘したのは石浩之氏・湯浅越男氏との罪談（石・安田・湯浅、2001）であった。「動物文明」の代表が畑作牧畜文明であり、「植物文明」の代表が稲作漁撈文明である。欧米文明は「動物文明」の畑作牧畜文明に分類され、伝統的な日本文明は「植物文明」の稲作漁撈文明の代表者である。畑作牧畜民は、パンを食べミルクを飲んでバターやチーズを作

り、肉を食べる。これに対し稲作漁撈民は米を食べて発酵食品を作り魚介類を食べる。

もちろん現代の日本人は肉も食べ、パンやミルクも飲むが、それは明治以降のことである。「すきやき」を食べるようになったのは明治以降のことであることをみても、読者の皆様は容易に想像ができる。あのおいしい「すきやき」を食べるようになったのは、日本人の歴史ではたかだか150年しかないのである。そしてパン食が普及し、ミルクを飲むことが普及したのは、第二次世界大戦の敗戦以降のことである（安田、2015a）。縄文時代以来の1万5000年にわたる日本人の長い歴史からみれば、我々日本人が家畜を飼いミルクを飲むようになったのは、ほんの最近のことなのである。

明治以前にも家畜の肉を食べミルクを飲んだ時代はあった。それは古墳時代である。だがそれはほんの一時のことであった。天武天皇の『肉食禁止令』（675年）の施行以降、家畜を飼い肉を食べミルクを飲む事はしだいにすたれていった。そして神仏習合思想の普及の中で、日本人はそれ以降1200年以上にわたって、「すきやき」は食べなかったのである。

もちろん、人間は生きるためにはたんぱく質を摂取しなければならない。炭水化物のみでは優秀な頭脳は作られない。優秀な子孫を残そうと思えば肉を食べ、ミルクを飲まなければならない。家畜の肉を食べることを止め、ミルクを飲むことを止めた日本人は、魚介類の肉からたんぱく質を摂取した。野生のイノシシやシカさらにはキジや水鳥など野生の動物も、貴重なたんぱく源となった。しかし、ミルクを飲むことは普及しなかった（安田、2015a）。

ここでおことわりしておかねばならないが、私は肉もパンもミルクも大好物である。パンやミルクを飲むことを否定するためにこの論稿を書いているわけではない。私の母方の祖父は乳牛300頭以上も飼う、すぐれた商売人であった。早く父をなくした私たちは、この母方の経済力で養育された。だから今でも祖父には深く感謝しているし、その経済力を生み出した乳牛とミルクと肉も大好きである。ミルクを飲み肉を食べることで育ったことに感謝している。

だが、森の視点から見ると、家畜を飼いミルクをのむ「動物文明」のありかたは、森を破壊するという闇を持っていた。そのことにこれまでなんの躊躇も感じなかった。だがその「動物文明」のライフスタイルだけでは、もはやこの地球上に誕生した生きとし生けるものとともに、千年も万年も暮らし続けてはいけない時代にさしかかっているのである。

「どうしてお前は『動物文明』のことをそんなに攻撃するのだ。この豊かなライフスタイルも『動物文明』のおかげでできたのではないか」という批判をよく受けた。たしかにその批判の半分は正しい。我々は「動物文明」の代表である欧米文明の力によって、このような豊かで便利なライフスタイルを構築できた。しかしこれからは「動物文明」だけでは、人類は生き残れないのである。その証が大村智氏が2015年のノーベル賞をもらったことに象徴されていると思う。土壌中に生息するバクテリアや菌類が人間の生命活動の維持に深くかかわっていることが見えてきたのである。土壌中のバクテリアがアフリカの

人々を失明から救ったのである。その土壌中の生命活動については、我々人類はまだなにも知らないと言ってよい。

家畜が人類を幸せにしてきた事は事実である。しかし、この生命の惑星地球では人間と家畜だけでは行き続けて行けないのである。そのことにやっと人々は気づきはじめてたのではあるまいか。

日本のキリスト教徒の方は、欧米のキリスト教徒とは異なり、多神教についても理解を示され、一神教が抱えた闇を一番よく知っておられる。同じように私はミルクを飲み肉を食べて育ったがゆえに「動物文明」が持つ闇をもっともよく知ることができた。もちろん「動物文明」にどっぷりと浸かってしまわれた方には、その闇は見えないかも知れないが。

明治以降から2015年までは、「動物文明」を礼賛した時代であると言ってよいだろう。だがその「動物文明」のもっている闇によりやく「植物文明」の人々は気づきはじめてたのではあるまいか。2015年末に放映されたNHKとイギリスのBBCの共同制作の番組でも、日本列島の生物多様性に注目するようになった。私は「動物文明」の抱えた闇を告発しつづけてきたが、やっと一般の市民もこのことに気づきはじめてたのではないかという気持ちである。

科学や学問は、世の中の一步先をリードしなければならない。ときには狂人にさえ見えるその科学者の指摘が、20年後いや40年後の未来を見通しているのである。

2. 畑作牧畜文明と稲作漁撈文明

何を食べるかは文明の精神と文明の原理のみならず、自然破壊の程度に大きな影響を与える。たとえば畑作牧畜民の文明は、拡大の過程において地球の森という森を徹底的に破壊し尽くした。これにたいし稲作漁撈民は、生きとし生けるものの生物多様性を温存し、命の水の循環系を守った。

そうした畑作牧畜文明と稲作漁撈文明の分かれ道は、1万5000年前に引き起こされた地球温暖化にある。10万年以上にわたる長かった氷河時代が終わり、晩氷期という温暖な時代に移り変わるのがこの1万5000年前のことである。福井県水月湖の年縞の花粉分析結果(Yasuda, et al., 2004, 安田, 2009)は、1万5000年前の地球温暖化を世界ではじめて明らかにした。水月湖の年縞の花粉分析の結果、1万5000年前の地球温暖化によって、氷期型の寒冷気候に適應したトウヒ属が減少を開始して消滅するまでに、約190年の年月がかかっていることが明らかとなった。つまり約190年以内に、摂氏5-6度日本列島の年平均気温が上昇した。その急激な地球温暖化に生態系の変化は追いつけなかった。水月湖周辺に後氷期型のブナやナラ類それにスギが安定的に成立したのは、急激な地球温暖化が引き起こされてから500年も経った1万4500年前のことであった。

吉野正敏氏(吉野, 1999)は、ユーラシア大陸の気候を、「モンスーンアジア」「乾燥アジア」「大西洋アジア」「北方アジア」に大きく区分した。こうしたユーラシア大陸の気候

区分が成立したのも1万5000年前のことである。湿潤なモンスーンアジアの風土の下で稲作漁撈文明は誕生し、夏には乾燥する冬雨地帯の大西洋アジアの風土の下で畑作牧畜文明は誕生した。

冬雨地帯のモンスーンアジアの人々は夏作物（夏に成長する作物）の稲を栽培し、たんぱく質を魚介類に求めるライフスタイルを確立し、冬雨地帯の大西洋アジアの人々は冬作物（冬に成長する作物）の麦を栽培し、家畜を飼いミルクと肉にたんぱく質を求めるライフスタイルを確立した。

そしてこの夏作物の稲を栽培し、魚介類にたんぱく質を求める稲作漁撈文明と、冬作物の麦の栽培し、ヒツジやヤギの家畜のミルクと肉にたんぱく質を求める畑作牧畜文明が誕生した。麦作と牧畜がセットになった混合農業と言われる畑作牧畜農業は、生産性が高く、都市文明をいち早く達成したとこれまで教えられてきた。ところが、その畑作牧畜文明は自然資源とりわけ森を一方的に収奪するという大きな闇を抱えていたのである。事実、人類が最初に都市文明を手にした所だと指摘されてきたメソポタミアの「肥沃な三日月地帯」【図1】は、現在では、岩山の禿山と化している。ここに森が存在したとは、とても思えない。しかし、1万年前まではここに豊かなマツ類とナラ類の混合林が存在したのである（Yasuda et al., 2000, Yasuda, 2001）。その森が過去1万年の間に完全に消滅したのである。その森を消滅させたのは人間である。この荒涼とした岩山の風景は、この畑作牧畜文明がいかに自然の資源を一方的に収奪してきたかを物語るものである。

もちろん畑作牧畜民の人々が森を破壊し、自然の資源を収奪しようと生きたわけではない。すこしでも豊かな暮らしをしたいと生きてただけである。それが世界中の自然の資源を収奪し、森という森を破壊しつくす結果をもたらしたのである。パンを焼いたり家を建て

森だけではない豊かな土壌と水も消滅した肥沃三日月地帯

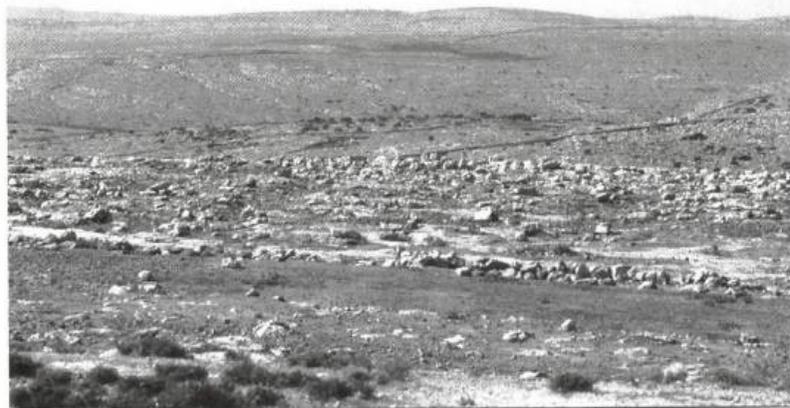


図1. メソポタミアの肥沃な三日月地帯は岩だらけの禿山だった

たりする日常の畑作牧畜民の活動以上に、ヒツジやヤギあるいはブタやウシなどの家畜が森を食いつぶしたのである。ヒツジやヤギは森の下草を食べ、若芽を食べるだけではない。ついには幹の薄皮まで食べ尽くす。ウシは草の根っこまでしゃぶり尽くせない口の構造になっている。しかし、ヤギの顎はしゃくりあごになっていて、草を根こそぎ食べ尽くす。メーメーと鳴くかわいい子羊も、森の視点から見ると悪魔に見える。ニュージーランドの緑の牧草地にへばりついて草をたべる白いヒツジは、大地のエネルギーを取奪する白いシラミに見えた。パンを食べミルクを飲み肉を食べるライフスタイルは、自然資源を取奪できる環境が維持されているかぎり、生産性の高いものであった。しかし、いったん人間の取奪が自然資源・自然の可容力を上回ったときに、限界に達する。

畑作牧畜民の文明原理に立脚した産業革命も、自然資源を一方的に取奪するものだった。産業革命は家畜にかわって機械が導入されただけである。自然の資源を一方的に取奪するというライフスタイルは、なにも変わらなかった。こうして畑作牧畜民は近代化をいち早く達成し、世界の森という森を破壊し、地下資源までも取奪し尽くした。だが21世紀にはいって、畑作牧畜民のライフスタイルを続けることは、もはやできないことが、明白になってきた。

その畑作牧畜民のライフスタイルに代わって、注目されてきたのが、稲作漁撈民のライフスタイルである。稲作漁撈民は水をためる水田を造らなければならなかった。自分の田に入ってきた水は自分のものではあるが、使い終わったらきれいにして次の田にかえさなければならぬ。その次の人もまた同じことを繰り返さなければならなかった。こうして上流と下流の人が、命の水の循環でつながる社会が構築された。その社会で生きていくためには、自分の欲望を100%全開するのではなく、他人の幸せ、さらには生きとし生けるもののために、残しておかねばならなかった。「利他の心」がなければこの稲作漁撈社会では生きていけなかった。

しかも、稲作は麦作にくらべてたいへん手間がかかった。まず水平に水をためる田を作り、畦を作らなければならない。そして種籾を選定し、苗代を作って苗を育て、田植えをして毎日水を変え、田の草をとって。害虫を退治し、稲刈りをやり、はさに干して乾燥させて、やっと取り入れである。取り入れてからも、脱穀ともみ干し、そして籾殻を臼でつき、ご飯を炊く。しかし、石ころ一つはいつにたただけで、石はガリツと歯に当たる。細心の注意が必要である。

命の水の循環を維持する稲作漁撈民が作り出す水田は、生物多様性の宝庫である。ヤゴやゲンゴロウ・ミズスマシなどの水生昆虫のみでなく、水田にはコイやフナ・ドジョウときにはウナギなどの魚類、タニシなどの貝類、ミミズや水草にいたるまで、そこは生きとし生けるものの天国だった。

人間の心は風土と密接にかかわっている。命の水の循環を守り、生きとし生けるものとともに暮らしてきた稲作漁撈民にとっての、最高の価値とは、「千年も万年もこの美しい

地球で、生きとし生けるものとともに暮らし続けること」だった。

これに対して麦の栽培は簡単だ。麦は斜面でも栽培できる。11月頃、雷とともに冬雨が到来する前に畑を鋤で耕し、麦の種をばらばらまいて、後はほっておくだけである。雑草も害虫も繁殖しない冬に麦は成長するのであるから、手間が要らない。あとは取入れを待つだけである。日本では昔、麦踏というのをやったが、地中海沿岸でそれをやっている光景を見た事はない。調理も簡単だった。シリアの調査のとき、焼きあがったパンは熱いので、それを土ほこりの舞う道路で冷ましている光景【図2】に何度もであった。お米なら石やほこりが混じったら大変だが、パンはパンパンとその土ほこりを払えば問題ないのである。

こうした畑作牧畜民がめざしたのは人間と家畜のみの世界だった。人間中心主義もこの畑作牧畜民の世界で生まれた。

これまで私たちは、なんという世界史を勉強してきたのであろうか。世界史で勉強した四大文明とは畑作牧畜民の文明だった。メソポタミア・エジプト・インダス・黄河はすべて、パンを食べミルクを飲み肉を食べる畑作牧畜民の文明だった。それは西洋人と同じライフスタイルをとった文明である。うがった見かたをすれば、だから西洋人は畑作牧畜文明は容易に理解できたのだと言えるかもしれない。だが精緻で複雑な工程を必要とする稲作漁撈民が文明をもっていないはずはないのである。人類の文明のはじまりは四大文明にあるというのは、完全にあやまりだったのではあるまいか。しかもその西洋人が書いた世界史が、正しい世界史だとして、当の稲作漁撈民の日本人も、戦後70年間、まったく疑うことはなかった。それどころか私たち日本人は、「稲作漁撈社会は重労働が支配し、封建的社会が支配する遅れた社会だ。泥にまみれウンコ臭い稲作漁撈民が、文明など持ってい



図2. ほこりだらけの道路でパンを冷ますシリアの人々

るはずがない」と教えられてきた。

マルクスという人が「アジア的生産様式」として断罪した稲作漁撈民が、文明を持っているなどは、露ほどにも思わなかった。でもよく考えたらマルクスは一度たりともアジアの稲作漁撈社会を訪れたことはないのである。そんなマルクスの言ったことを信じ込み、「マルキストでなければ人にあらず」と言うほどに、戦後の日本人は自らの稲作漁撈文明に自信をなくしていた。戦争に負け、自信をなくした教育とは恐ろしいものである。

だが、稲作漁撈民が文明を持っていたことが明らかになったのである。長江文明の発見がそれである。長江文明については梅原・安田（2004）、安田（2009a）、Yasuda（2012）などでこれまで述べてきた。そうした稲作漁撈民がつくりだした長江文明については、ここでは詳述しないが、その長江文明も四大文明と同じ6000年前には、すでに形成されていたのである。

そして、人類文明史の発祥地は畑作牧畜民の「肥沃な三日月地帯」とともに、稲作漁撈民の暮らした東アジアにも「肥沃な大三角形地帯」（安田、2015b）があったのである。私（安田、1999）はこれを「東亜稲作半月弧」、「西亜麦作半月弧」とよんだ。こうしてユーラシア大陸の人類文明史の発祥の地は、稲作漁撈文明の「東亜稲作半月弧」と畑作牧畜民の「西亜麦作半月弧」になった。これまでの「人類文明史の発祥地は四大文明であり、畑作牧畜民の独占物だ」という世界史の常識は、第二次世界大戦で敗戦し、「自らの歴史と伝統文化に自信をなくしたほんの一時の産物であった」と言われるときがもうやってきている。

3. 太陽の神話と星の神話

ギリシャ神話は畑作牧畜民の神話であり、日本神話は稲作漁撈民の神話であった（安田、2015b）。畑作牧畜民は星を崇拜し、稲作漁撈民は太陽を崇拜した。

東西軸を代表するものは太陽であり、南北軸を代表するものは北極星である。人類文明史は北極星を中心とする南北軸の文明が、太陽を崇拜する東西軸の文明を、駆逐し支配する歴史でもあった。エジプトを案内してくださった吉村作治氏は、エジプト文明も東西軸から南北軸に転換した事実を教えてくださいました。

東西軸から南北軸への転換は、太陽の神話から星の神話への転換、女性から男性への転換、循環的世界観から直線的世界観への転換などのいくつもの精神世界の変化と深くかかわっている。

日本の太陽神は女性のアマテラスである。つまり稲作漁撈文明の最高神は女性だということである。ところが中国の黄河文明の太陽神は炎帝、ギリシャ神話の太陽神はアポロンそしてキリスト教のイエスもイスラム教のマホメットもいづれも男性である。つまり畑作牧畜民の最高神は男性であるということである。これは太陽を崇拜した女性中心の文明から、星を崇拜する男性中心の文明への転換を意味する。

各民族の神話は、文明の精神と文明の原理を決定する原点のようなものである。ところが第二次世界大戦に敗戦した日本人は、畑作牧畜民のギリシャ神話を勉強し、星座も勉強した。だが、稲作漁撈民の太陽の神話にいたっては、戦後70年の間、小・中学校の教科書でさえ、まともにとりあげられることはなかった。ギリシャ神話は知っているが日本神話は知らないという子供たちが大勢、生産された。先生たちは太陽をシンボライズした日本の国旗を掲揚することさえ反対した。国会にアマテラスを最高神とする天皇陛下が臨席されることを許さない、不思議な教育が続いた。

2015年11月23日の勤労感謝の祝日の京都は、外国からの観光客でごったがえしていた。外国の人々がようやく稲作漁撈民の文明原理の重要性に目覚めはじめた。

だが勤労感謝の日はももとは新嘗祭という稲作漁撈民にとって、もっとも重要な豊穡の儀礼の祝日であった。豊かな収穫に感謝し、新米を神々にささげ、翌年の豊作を祈る。それは稲作漁撈民の神話をひっさげた日本の神道にとって、もっとも重要な祝祭日であった。

私は京都の上賀茂神社の新嘗祭に参加した。新嘗祭は収穫祭であるからこそ、実りの秋の11月23日に行われる。勤労感謝の日だったら5月1日のメーデーの日がよほどふさわしい。アメリカの大学を卒業した若い秘書にこのことを話したら、「新嘗祭というすばらしい祝日があるのに、どうして勤労感謝の日にしたのですか」と怪訝な顔をしていた。

新嘗祭の日、日本の天皇は今年収穫された新米と海の幸・山の幸を神々とともに食される。ノーベル賞を顕彰されるスウェーデンのグスタフ国王は、環境問題の解決に熱心で、毎年1週間ほど泊り込みで、世界の著名な研究者を集められて、ストックホルム以外の場所で研究会を開催されている。私もグリーンランドとスウェーデン郊外のハイランドでおこなわれた2回の研究会に招聘いただいた。そのとき日本の天皇がお田植えをなさり、稲刈りもなさるお話を申し上げた。そうしたら、「我々は労働はしない。日本の天皇は労働をされるのか!」と驚いておられた。

畑作牧畜民のリーダーは労働をしないが、稲作漁撈民のリーダーは労働をする。自然の豊かな恵に感謝する心をもって労働をする。ここが人間の幸せのために、自然を一方的に収奪する畑作牧畜民のライフスタイルとは異なるところである。生きとし生けるものとともに、この美しい地球環境を維持しながら、千年も万年も生き続けることに最高の価値をおいた稲作漁撈民は、自然の恵みに感謝しながら労働をする。

地球上の生きとし生けるものの命を守り、美しい地球環境を維持するためには、命の水の循環系を守ることが必要である。稲作漁撈民は森里海の命の水の循環系を守りとおした。稲作漁撈民の文明原理の根幹には、この森里海の命の水の循環がある。そのことをもう一度思い起こす意味で、新嘗祭の復活は必要なのである。

富士山の山頂は3776m、駿河湾の最深部は2500mである。直線距離でわずか70km前後の距離しか離れていない。地球というマクロな視点で見たら、絶壁のようなものである。

6000m以上の落差のあるその絶壁に、私たち稲作漁撈民はしがみついて暮らしているのである。その稲作漁撈民がこの地球上で千年も万年も暮らし続けていくためには、森里海の命の水の循環系を守ることが、最低限必要なのである。

この森里海の命の水の循環系を守るライフスタイルをとることは、「利他の心」なくしては守りえなかった。上流の人と下流の人が仲良く暮らさないことには、森里海の命の水の循環系を守り、美しい地球で暮らし続けてゆけなかった（安田、2009b）。

稲作漁撈民は、命の水によって上流の人と下流の人がつながっている社会を構築した。だから自分の利益は7-8分、残りは他人や命ある他者のためにとっておかなければいけなかった。

21世紀は東洋の時代である。そのとき必要なのは東洋の文明の原理、稲作漁撈民の文明原理である。自然を一方的に収奪する西洋の畑作牧畜民の文明原理に代わる、東洋の稲作漁撈民の文明原理の重要性に、私たち自身が気づき、地球と人類の平和と繁栄のために役立てることが必要なのである。新嘗祭の復活はその第一歩なのである。

4. それはあなたのライフスタイルの転換からはじまる

地球環境は畑作牧畜民の欧米文明によって食い荒らされた。畑作牧畜民の物質エネルギー文明に魅了された人々は、こぞって畑作牧畜文明の申し子になった。それは畑作牧畜民の文明がお金をもうけることに最大の価値を置き、過去に対する感謝や未来に対する責任をまったく感じない市場原理主義に立脚しているからである。

だがこのライフスタイルを続ける限り、人類と地球に未来はない。いずれは地球資源をめぐる戦争が引き起こされるだろう。地球が砂漠と化し、宇宙に逃れる夢を畑作牧畜民は描いている。そしてそれに影響された日本人までがいる。だが火星の資源をこの地球にまで持ってくるには、あと千年はかかるだろう。それまで地球はとうていもたない。宇宙は生物としての人間が暮らすにはあまりにも過酷なところなのである。

暗雲がただよいはじめたその畑作牧畜民のライフスタイルにたいし、この美しい地球で森里海の命の水の循環を守りながら、千年も万年もいき続けることに最高の価値をおいた稲作漁撈民のライフスタイルを再評価することが今こそ必要なのである。

「西洋の没落」（シュベングラー、2015）の著者はO・シュベングラーである。「西洋の没落」は100年近く前に予言されたことだが、それがいよいよ現実化してきた。団塊の世代の青春を美しく飾ったのは、ポール・モーリアの美しい音楽だった。それは西洋文明の華そのものだった。しかし、今や西洋はイスラム教徒によって大きな変質を迫られている。

それを象徴するのが2015年のシリア難民のドイツへの流入と、フランス・パリでの自爆テロ事件であろう。これから西洋は没落に向かって急速に衰亡していくだろう。四方を海に囲まれている日本列島のありがたさをつくづく感じる。

シリアからの難民は100万人を超え、膨大な数に達している。シリアでの内戦を避けて

の移動だが、アフリカからの難民も、豊かなヨーロッパをめざして移動している。人の移動は文化の移動を伴う。イスラム教の人々が少しでも豊かな暮らし、平穏な暮らしを求めるのは当然である。その欲求が難民を生む。受け入れる側は人道的観点からという大義のもとに難民を受け入れざるを得ない。ところが文明を変質させ崩壊に導くのはこの民族の移動なのである。ローマ文明の崩壊はゲルマン民族の大移動によって導かれたことを思い起こしてほしい。

「我々はテロと闘う」という勇ましいヨーロッパ人の言葉には、「目には目を歯には歯を」というメソポタミア文明以来の「血は血で洗い流す畑作牧畜民の文明の原理」を感じる。だがこうした文明の原理に立脚する限り、テロは永遠に終わらないだろうし、「憎しみの連鎖」を断ち切ることもできない。この西洋文明の栄華を作り出した畑作牧畜文明の原理は、もうゆきづまっているのである。

東洋にはそれとはまったく異質の文明の原理がある。それは日本にある。日本の縄文時代を見たらわかる。日本の縄文時代は人と人が集団で殺しあう戦争がない時代を1万3000年も続けていたのである。そこで一番大切にされたものが生命である。生命が誕生し成長しそして死ぬ。この「命の連鎖」に最高の価値を置いた時代である。だから生命を生み出す女性が大きな力を持ったのである。土偶の99%は妊婦であった。

こうしたことを私は2013年に『1万年前』（安田、2013）で書いた。我々日本人は西洋とはまったく異質の文明を基層に持っているのである。それは闘わない殺しあわない平和の文明の原理である。

この縄文時代が復権した日本の平安時代や江戸時代は、戦争のない平和な時代を維持できた。遣唐使を廃止した平安時代や鎖国をおこなった江戸時代には、基層文化としての縄文文化の伝統が復興した時代である（安田、2004）。同時に生命を誕生させる女性が輝いた時代でもある。平安時代の妻問婚しかり、江戸時代の女性は家名を守るためにがんばった。

だが明治以降、欧米列強の侵略に対抗するために、やむなく西洋文明を受け入れ、欧米文明の申し子としての道をひたすら歩んできた。だがその結末は第2次世界大戦の敗戦というみじめな結末をもって終わった。力を力でねじふせようとする文明の原理は日本にはあわないのである。

2015年10月、英国と中国は蜜月関係に入った。「中国マネーにひざまづく落日の西洋文明」の文字がマスコミ各誌で躍る。「西洋の没落」が白日の下にさらけ出されはじめた。南シナ海の中国による人工島と基地の建設の問題をはじめとして、中国はこれから経済力をバックに世界支配に乗り出すだろう。だがその中国は日本文明の精神の前にひざまづくのではないか。日本はいよいよ自らの足元の文明の精神を見つめなおすときが来た。

そして日本人は自らのライフスタイルを、稲作漁撈文明のライフスタイルに変えていかなければならない。

そのためにまずやるべきことは、

- ①どれもいい参考文献に挙げた私の本を読んでほしい。
- ②村上和雄氏（村上、1999）の言われる「サムシンググレート」の存在をひそやかに感じる心を醸成すること。
- ③生きとし生けるものの命の重要性に目覚め、自然への畏敬の念を持ち、アニミズムの心を復活すること。

この3つからまず挑戦してはどうだろうか。

本稿はこうした畑作牧畜民のライフスタイルに心酔し、稲作漁撈民のライフスタイルの価値の重要性を忘れさろうとする日本人に対して、警鐘を鳴らすものである。

文献

- 石弘之・安田喜憲・湯浅起男：『環境と文明の世界史』洋泉社 2001年
- 梅原猛・安田喜憲：『長江文明の探究』新思索社 2004年
- O. シュベングラー（村松正俊訳）：『西洋の没落』五月書房（1、2） 2015年
- 村上和雄：『サムシンググレート 大自然の見えざる力』サンマーク出版 1999年
- 安田喜憲：『東西文明の風土』朝倉書店、1999年
- 安田喜憲：『文明の環境史観』中公叢書 2004年
- 安田喜憲：『稲作漁撈文明』雄山閣 2009a年
- 安田喜憲：『山は市場原理主義と闘っている』東洋経済新報社 2009b年
- 安田喜憲：『一万年前』イーストプレス 2013年
- 安田喜憲：『ミルクを飲まない文明』洋泉社 2015a年
- 安田喜憲：『日本神話と長江文明』雄山閣 2015b年
- 吉野正敏：『モンスーンアジアの環境変化』地理学評論、72、1999年
- Yasuda, Y.; Kitagawa, H.; Nakagawa, T.: The earliest record of major anthropogenic deforestation in the Ghab Valley, northwest Syria. *Quaternary International*, 73, 127-136, 2000.
- Yasuda, Y. (ed.): *Forest and Civilisations*. Lustre Press and Roli Books, Delhi, 2001.
- Yasuda, Y. (ed.): *Origins of Pottery and Agriculture*. Lustre Press and Roli Books, 2002.
- Yasuda, Y., Yamaguchi, K., Nakagawa, T., Fukusawa, H., Kitagawa, J. and Okamura, M.: Environmental variability and human adaptation during the Lateglacial/Holocene transition in Japan with reference to pollen analysis of the SG4 core from Lake Suigetsu. *Quaternary International*, 123-125, 11-19, 2004.
- Yasuda, Y. (ed.): *Water Civilization: from Yangtze to Khmer Civilizations*. Springer, 2012.